

くる。バケツに入れて水をガブガブ飲みながら、汗と塩にまみれて積み込むが、監視兵はダワイ、ダワイと怒鳴る。

二回目の冬がやってきた。満州で冬にはなれているが、抑留生活の冬は格別だ。大地が数メートルも石のように凍結しているというに水道管を敷設する溝を掘れという。先が丸くなったツルハシはね返るばかり、作業は遅々として進まないと警備兵は防寒外套を脱げと命令する。寒ければ穴を掘れという、一日かかってでも二十センチの穴が一メートルも進まない。昼休みに腰を下げた黒パンを立ったままかじる。時間をかけて少しずつ食べる。吹きさらしの路上に砂を巻き上げた風が吹きつける。

復員

我々作業隊の報酬は事業所から収容所へ支払われるのだそうだ。それを食事代などの経費に当てられ、余れば給料として兵隊にくれることになっているようだが、もらなかったことがない。

二回目の冬も過ぎ、昭和二十二年の六月食当たりか、

下痢が続いたため、収容所内の病室へ入院した。一週間ほどで退院したとき、身回り品を持ってすぐ貨車へ乗り込めというソ連軍の命令だ。病弱者百余人がバルハシを出発、途中幾つもの駅で増結して、ついにナホトカへ。

虜囚の記

岐阜県 斎藤 克己

運命の岐路

私の運命は、朝鮮の三十八度線以北にて終戦を迎えたときから、現在に至るまで半生を変えたといっても過言ではない。その当時、私の所属部隊は、平壤の大同江近くの高射砲大隊で、その部隊に入隊したのが終戦の年の五月、満二十一歳であった。

一戦も銃火を交えずに終戦、その直後朝鮮人で組織した治安隊に武装解除を受け、兵舎内の物品は民間人に大半略奪され、旧日本軍隊の面目は跡形もなく踏みにじら

れた。その惨状は見るに忍びないものであった。

その後、私たちは治安隊の監視下で、味気ない日々を送っていた。やがてソ連軍が進駐してきた。そして突然移動命令が出され、その日の夜、装具と食糧をまとめ、夜間行軍で平壤郊外東方の三合理の元演習場の兵舎と馬小屋に入れられ、有刺鉄線の張られた柵に囲まれた収容所生活が始まり、捕虜となった実感をかみしめた。

ここでの労役は近くの山にてまき取り作業が主だった。何人かの者が脱走を企てたが捕まり、皆の目前で見せしめのため銃殺の処刑も行われた。私たちは兵舎がいったいなので馬小屋で冬を迎えた。直接地面にテント布を延ばし毛布を一枚敷き、風を防ぐ戸もない状況にて寒気に震え、飢えに耐えその冬を越した。

翌二十一年三月、近くの秋乙元兵舎に移り、少し人間らしい生活ができるようになった。そして六月初め、日本帰国の命令が出たと言われ喜び勇んで列車に乗り込んだ。列車は日本海側の興南港に着き、船で一路日本海を渡って帰国するとのうわさだったが、数日後入港したソ連貨物船に乗船した。そのころの私たちの関心は船の進

路だ。日本海を南下して日本に向かえば、陸地は右側に見え、左側ならソ連領内に向かうことになる。そのいずれかに進路をとるかが問題であり、皆の気持ちが集中した。

しかし、船はみんなの思いを乗せて出港。

乗船直後、熱気の漂う船倉深くに押し込められて、船の進行方向は全く不明状態だった。甲板へ出ることができたのは翌日の昼ころだった。甲板に出て皆の顔を見ると、生気がなく暗い表情だ。果たして船は左側に遠く陸地を見ながら北上している。日本への帰国の思いは断たれた。このとき痛切に戦争を恨む気持ちを抑えることはできなかった。敵に対して、ただ一発の銃戦もしていないのに、なぜ捕虜になるのか。

出港して二日後、ソ連領のボセツト港に着いた。「ダワイ、ダワイ」とロシア語の声にせかされて、収容所まで約八キロほどの道を荷物を背負い歩かされた。着いたところはテント張りの幕舎だった。近くに鉄道の引込線があり、すでに多勢の仲間たちが生活していた。

私たちもここで一緒に生活をするようになったが、一

番困ったのは、飲料水がないことで、地面に井戸を掘るか、近くの池の濁った水を使用するか、両方とも茶色の水しかないのである。生水は絶対に飲めない。飲めば下痢間違いなのである。おまけにこの時期は日本の梅雨期のように毎日々々ここにいる間一か月近く雨が降り続いた。雨はテントの中までも進入し、眠れぬ夜も幾度かあった。雨期が終わると連日四十度以上の猛暑が続き、体調が悪くまいってしまった。

このころから一週間に一度くらい引込線に空の貨物列車が入ってくるようになり、今度の列車は帰還列車だ、ウラジオストックまで貨車で行き、そこから日本船に乗って帰国するのだ、といったまことしやかな流言が伝わっていた。

ウラルを超えて

他人ごとのように思っていたその列車に、私たちも乗る順番がきた。機関車は黒煙を中天に漂わせて、早く乗れといわんばかりである。他の部隊の混成で千五百人編成にて出発した。七月二十八日、行先不明である。

この列車が果たして日本に向かうのかどうかはだれに

もわからない。貨物の内部、家畜の運搬用なのか、汚く物すごく臭いので閉口した。中間に棚板が設けられ、上下二段ベット式になっており、扉のある入り口近くには小さな酒だるが置いてある。進行中の排せつ物処理用とのことだ。夕方出発、二、三日は扉の開閉はなく、真っ暗に近い中で、今どこを走っているのか皆目わからない状態であった。ハバロフスクを通過し、アムール河を渡ったところから、扉が五、六寸くらい開けられた。線路はシベリア鉄道らしく、太陽の位置から見ても西へ進んでいることは明白で、帰国の夢は完全に断られた。

毎日、単調な生活を貨車の中で送り、時折引込線で長時間停車するときもあったが、列車は進路を変えることはなく、ひたすら西へ西へと向かって走り続けた。

出発後何日目に海のようなところへ出た。バイカル湖だ。水辺の近くにとまったので、監視の中、外へ出て新鮮な空気を吸い、湖の水を飲んだ。ノボシビルスク駅の近くで入浴し、ソ連領を東西に二分するといわれるウラル山脈を越えて、列車はさらに広大な原野を西へ西へと進行する。

いつのまにかシベリア本線より支線に入り、八月二十四日、ウクライナ共和国のハリコフから約二百キロ北のアルチョウモスク駅に着き下車させられた。ポシェットを出たのが七月二十四日、二十七日間の長旅で、全く足腰が正常な状態に戻らず、しばらく歩行が困難だった。駅より二十分ほどのれんがづくりの建物に入れられ、やっと足腰を思いきり伸ばすことができた。ここで生活するようになって、私はマラリヤにかかり、毎日四十度以上の高熱に十日間くらい苦しめられた。

労役の日々

八月三十日、マラリヤの最中に移動命令が出て、約百人が米国製のトラックに乗せられて出発。着いたところは炭坑で名高いドンバス州だった。周囲には十三を数えるボタ山が見えた。ここも飲料水が悪く、赤茶けた鉄分を含んだ水で、生水は飲めないで困った。その収容所にいる間、下痢がとまらない状態だったことを今でも覚えていてる。

ここの作業は炭坑の石炭掘りかと思っていたが、そうではなく、石山（カーメン）採掘の作業だった。歩いて

三十分くらいところに採石場があり、スコップ、ツルハシ等の土方器具を使って、一人一立方メートルの容積になる石の切り出しがノルマで、帰るころになると一メートルの棒を持って責任者が測りに来て、まだノルマが達成していないと、収容所へは帰してくれなかった。気の合った者が組をつくり作業に当たるのだが、よい器具の確保や、石の切り出しと積み上げに適したところを探すのが大変であった。

また、収容所近くの引込線に貨車が入ってくると、石や石炭の積み込み作業にも昼夜の区別なく容赦なく動員された。各分隊単位に使役の順番が決まっており、貨車が満杯になるまでは、何時間かかろうとも帰してくれず、食事も抜きだ。一番つらかった労働の一つであったと今でも覚えている。

その年の十二月また移動だ。百八人がガタガタの道路を、おなじみになった米国製のトラックに二、三時間くらい揺られ、着いたところはスラヴィヤンスクの町で、労働は工事の仕事だった。ここには塩工場、牛乳工場、紙工場、陶器工場などあり、私は陶器工場に回された。

主な製品は磚子部品と便器で、仕事は釜焼きの燃料の石炭と、原料の粘土の運搬が主だった。この年の寒気は厳しく、零下二十度から三十度前後の毎日が続いた。また食糧事情が非常に悪く、ほとんど全員が栄養失調だった。

年が開け三月に入ると、春の野に草の新芽が伸び始めると、タンポポ、ナズナ、アカザ等仕事の目を盗み、手当たり次第に摘みとって熱湯で処理し、夢中になって食べた。毎日緑色の便が続いた。

毎月二回、女医による名ばかりの身体検査があり、表面の皮膚をちょっとつまんで見ただけで等級をつけられて、仕事の軽重が加減されるので、なるべく等級が下がりが軽労働になるように、要領よく振る舞う者も大勢いた。いま一つは発熱であり、三十八度以上あれば文句なしに完全休養になるので、この方でも努力して熱が上がる工夫をした。

その年の六月また移動だ。百五十人が転出する命令が出た。午後四時ころ少なくなった持ち物をまとめ出発。山野を走る途中、ところどころドイツとの戦いで破壊さ

れた戦車の残骸が道のあちこちに放置されており、また砲弾の落ちた跡か、ところどころに大きな穴があり、激しかった独ソ戦の傷跡が生々しく残っていた。

着いたところはザイツェヴォというところで、山の上の木造平屋建ての廃屋だった。屋内はまるで南京虫の巣のようで、ほとんど眠れない夜が続いた。しかし囲いの柵がなく、解放的な毎日だった。作業は、山の下のれんが工場で焼けたれんがの釜出し作業だった。釜の中は高熱で暑く汗だくだくの毎日が、一緒に働く民間人がよかったので、あまりつらいとは思わなかった。ここでの期間は短く、十一月に最後の収容所に移った。イジュン収容所である。今までになく一番立派な二階建ての建物だった。有刺鉄線が三重に張られ、別に高圧電流の電線が張られていて、三百平方メートルくらいの敷地の中にあり、ドイツ人やポーランド人捕虜も大勢いた。全部で八百人くらい収容されていたと思う。

労働は近くを流れるドニエツ河に鉄橋を架ける作業だった。作業場までの間には、帝政ロシア時代の建物であろうか、童話に出てくるような、頭部が円形の大きな

教会風の建物が目についた。鉄橋工事は大分難工事のよう
うで、仕事上の技術的実権はドイツ人技術者の指示で行
われていた。レールの上に枕木のような角材が井げた状
に組まれて、その上に鉄骨が組み始められていた。組み
立てられた鉄骨が少しずつ川の方へ押し出される仕組み
になっており、作業は昼夜兼行の三交替制で休みなく続
けられた。私たちの帰国のときまではまだ完成しなかつ
たが、この労働は大変な重労働で、零下二十八度までは
休めなかった。

そして昭和二十三年の正月を迎えたのが、ソ連に抑留
されて以来初めて、正月らしい気分を味わうことができ
た。炊事係は限定された材料を工夫して、精いっぱい
正月料理をつくってくれた。午後は大広場で国際演芸大
会も開かれ、驚いたことに収容所長の家族まで見物に来
たのである。私はこの収容所で作業の合い間や休日を利用し、作業場から白カバの木切れを拾ってきて、小刀を
工面し麻雀パイをつくり、皆と楽しんだものである。支
給品のわずかなたばこや砂糖を賭けたりした。栄養失調
は続いていたが、収容所生活もいろいろな楽しみをつく

り、なれてきた。

帰国

やがて五月一日、ソ連最大の祭日メーデーも過ぎたこ
ろから、帰還情報がもっともらしく語られるようになって
きた。しかし私たちは今までに何度となくだまされ続けて
きているので、そのまま信用する気持ちにはなれなかつ
たが、今度のうわさは本当らしい様子だ。

昭和二十三年九月二十九日、全員荷物を持って広場に
集合せよとの命令が出た。待ちに待った帰国である。ナ
ホトカまで一か月の輸送列車の旅が始まった。再びウラ
ルを越え、ナホトカに着いたのが十月三十一日の未明で
あった。幕舎の収容所に入り、共產主義教育も駆け足で、
その夜波止場まで行軍。岸壁に高砂丸が……。そして十
一月二日舞鶴湾に入港した。

すべては遠い日の夢のような出来事である。しかし、
この事実は止しく子々孫々に伝えていくべきである。